

ミャンマーでの衝突から半年 避難民支援の現場から

国際赤十字では、政治的・民族的背景および避難されている方々の多様性に配慮し、『ロヒンギヤ』という表現を使用することとしています。

バングラデシュ南部避難民の今



©Antony Balmain/Australian Red Cross

2017年8月以降、ミャンマー・ラカイン州での暴力から68万以上もの人が避難しているバングラデシュ。山を切り崩した地にあるキャンプでは、竹を組み、ビニールシートをかぶせただけのテントが見渡す限り広がっています。また、避難民はバングラデシュでは働くことが認められておらず生きるために必要なものは支援に頼るしかありません。しかし、キャンプを覆うのは決して絶望感だけではありません。数メートルにもおよぶ竹や、料理に使うための薪、トイレを作るための石を運ぶ人などで溢れかえっており、食べ物や洋服を売っている露店、カフェ、床屋もあれば野菜などが育てられている農園までもあるのです。どんなに危機的な状況でもそれを乗り越えようとする人間の生きる力を感じずにはいられません。

現在の様子はこちら

https://www.youtube.com/watch?time_continue=4&v=gv9J116d2_Q

https://www.youtube.com/watch?v=AhRTLF_1a6Q

これまでの活動

■2017年8月25日：ミャンマー・ラカイン州での衝突

ミャンマー・ラカイン州での衝突の発生後、隣国バングラデシュの南部へ避難民が流入。バングラデシュ赤新月社（イスラム圏の赤十字社）は着の身着のまま避難してきた人々の救援活動を開始しました。



命からがら徒歩やボートなどを使って逃げる

人々 ©ICRC

■9月15日：国際赤十字が支援活動の規模を4倍にすると発表

バングラデシュには以前よりミャンマーからの避難民が住んでおり、2017年3月に日本赤十字社は1,000万円の資金援助を実施。8月25日以降、避難民の流入に歯止めはかからず、この頃までにバングラデシュに逃れた人の数は40万人以上にのぼりました。彼らが住むのは、竹や木の柱とビニールシートの屋根でできた小屋。バングラデシュ赤新月社は避難民への物資配給や医療支援活動を強化しましたが、安全な水や食料、生活用品など全てが足りない状況に。国際赤十字・赤新月社連盟は、10万人を対象に、それまでの4倍にあたる総額1276万スイスフラン（約14.7億円）規模に活動を拡大し、国際社会に支援の要請をしました。



見渡す限りテントが広がる ©ICRC



過酷な環境下での生活 ©ICRC

現場の様子はこちら

https://twitter.com/JRCS_PR/status/930361460353413120

■9月16日：日赤が先遣隊を派遣

救援活動開始にむけた現地状況調査・調整のため、先遣隊として医師1人、看護師1人、事務職員3人をバングラデシュに派遣しました。

■9月21日：国際赤十字・赤新月社連盟が緊急医療チーム※の派遣を要請

現地で高まる医療ニーズに応えるため、国際赤十字・赤新月社連盟は緊急医療チームの派遣を日本赤十字社に要請しました。他にも野外病院、給水・衛生、救援物資などの支援を各国の赤十字・赤新月社に要請。

※現地の社会インフラが機能しなくなる緊急事態や大規模災害の発生時に緊急出動可能な訓練された専門家チームおよび資機材。日本赤十字社は、診療所を設置し、基本的な医療、母子保健、予防接種などを提供するための資機材と人材を整備、訓練している。

詳細はこちら <http://www.jrc.or.jp/activity/international/about/saigai/>

■9月 22日：日赤が緊急医療チームを派遣、救援金の受付を開始



避難民リーダー、キャンプの管理を行うバングラデシュ軍担当者などと交渉し活動場所を確保する資金の受付を開始しました。

バングラデシュ赤新月社の医療活動を支援するため、医師、看護師、助産師、薬剤師、こころのケア要員、事務管理要員などで構成される緊急医療チームを派遣しました。バングラデシュ南部コックスバザールに拠点を置き、既に現地で調査を開始していた先遣隊とともにまずは、活動場所の決定のため避難民キャンプを訪問しました。発電機やテント、浄水設備、食料、小規模手術に必要な診療セットなどが含まれてれている約 20 トンの資機材もドバイから到着しました。また、日本国内では活動に必要な

活動開始の様子はこちら

<https://www.youtube.com/watch?v=13LJ1dFZP3s>

救援金の受付はこちら

<http://www.jrc.or.jp/contribute/help/cat817/index.html>

■9月 27日：日赤が活動を開始

複数のキャンプでの避難民への聞き取りなどに加え、アクセス、安全状況、広さ、水はけ、日向など様々な点を考慮して巡回診療とこころのケアを行う場所を決定しました。

バングラデシュ赤新月社の医師と助産師とともに一つの活動地で毎日 100~150 人の患者を診療しています。活動当初は、ミャンマーから逃げてくるときに怪我を負った患者に加え、不衛生な環境による下痢、更には 30 度以上の高温多湿の気候による脱水症状の患者が多く来院しました。現在でもキャンプの中は不衛生な状態が続いている、皮膚疾患の原因ともなっているため衛生指導にも取り組んでいます。異常所見がないのに「今の状況を何とかしてほしい」という苦しみを訴える患者もいます。何日も食べることができないと訴え、栄養状態の悪い子どもを連れてくる母親が来院した際は、近くの栄養センターなどへ搬送します。



避難民に寄り添いながら診療にあたる



竹の橋を渡ってキャンプの奥地へ行く

当初は、6月頃から続く雨季により舗装もされていないキャンプ内の道は悪い状態が続いたままでした。豪雨と強風が続き、翌日キャンプに行くと避難民の住むテントが倒壊した光景が目に入ることも度々ありました。診療のための荷物を背負って、ぬかるんだ道を時には1時間以上かけて活動地まで行くのは体力と気力を要しました。そのような時に助けてくれたのが避難民のボランティア。毎朝、車でキャンプ前まで行くと避難民ボランティアが集合し、

荷物を持って活動地まで一緒に向かいます。

また、活動開始直後も避難民の流入は続いており、要員が滞在しているホテルからキャンプの近くになるとミャンマーから国境を越えてきたばかりと思われる避難民が道沿いに溢れている様子が何度も見られました。時には、一夜で数千人、数万人の避難民が一気に国境を超えるという情報のもと国際赤十字から緊急出動準備の要請もありました。

拡大する避難民キャンプのニーズ調査も続け、2月21日現在、4カ所で巡回診療を行っています。

■9月27日：先遣隊が帰国、報告会を開催

先遣隊として活動した医師と看護師が帰国しました。横江正道医師（名古屋第二赤十字病院）は、「避難民の増加が尋常でない。明日の予測も困難。自然災害支援との違いを目の当たりにした」と語り、矢野佐知子看護師は「診療と共に、女性や子どもたちのこころのケアが必要だと強く感じた」と報告しました。避難民が増え続け、刻一刻と変わる状況の中での支援の難しさに直面しました。

日本記者クラブホームページ

<https://www.jnpc.or.jp/archive/conferences/34937/report>

会見動画

<https://www.youtube.com/watch?v=SJowichWS0s&feature=youtu.be>

■10月23日：国際赤十字が支援活動の規模を更に3倍にすると発表

10月中旬までに避難民の数は60万人近くに達しました。増大するニーズに対応するため、これまでの3倍にあたる総額約38.7億円規模に活動を拡大し、国際社会に更なる支援を要請しました。

■11月5日：日赤仮設診療所の建設を開始

活動地の調査を続ける中で、常時、医療サービスを提供している施設がない地域を見つけ、仮設診療所の建設を決定しました。バングラデシュ赤新月社やキャンプの管理をしているバングラデシュ軍との協議を経て、全体で約 1000 m² (約 450 坪) の土地を確保しました。粘土質の土地であるためテントの安定した設置が難しく、かつコレラなどの感染症治療やその患者を収容する際に汚染水が敷地内に滞留する恐れがあることから、地盤の安定化および水はけをよくする必要がありました。重機がないため土地の表面を全て人力で整地し、レンガ・砂利やコンクリート床を敷設する工事を実施しました。



キャンプを縦貫する道路をバングラデシュ軍が整備しており、日赤はその道路沿いに診療所を建設することに。写真は、軍が道路を整備しているところ。左手に診療所、道路を挟んで右手に事務所が建設される。(10月23日撮影)



工程通りにはなかなか進まないのが常 (11月16日撮影)



日々変化する状況に応じて改修を続けている (12月12日撮影)



避難民ボランティアとともに蚊帳を網戸として設置



診療所の屋根にソーラーパネルを設置

© IFRC/Francis Markus

■12月8日：第一回「マジ会議」を開催



避難民ボランティアの通訳を介して診療所の説明を行う

避難民キャンプには「マジ」と呼ばれる町内・自治会長のような役割を担う人たちがいます。バングラデシュ当局に加え、マジと話をして彼らの協力を得て活動を行っています。仮設診療所周辺地域の20人程のマジを集めて診療所の説明会を実施しました。その地に住む避難民と協働し、話し合いながらこの地域の診療所だと思ってもらえるように一緒に作っていました。

きたいことを伝えました。現在も2週間に一度、会議を開いて受益者の声を聞いています。

■12月9日：日赤仮設診療所を開院



レントゲンの撮影や小手術ができる仮設診療所を開院しました。この地域では最大規模の診療所で地域住民からの期待はとても高いです。ノルウェー赤十字社とフィンランド赤十字社が運営する野外病院をはじめキャンプ内外の医療施設と連携しています。診療所の受付や通訳、警備などとして活動に取り組んでいる避難民ボランティアとともに質の高い医療を提供しています。

近隣の医療施設からレントゲン撮影の依頼もある ©IFRC /Victor Lacken



手術を行う医師と看護師



救急車として使うのは他の病院に搬送する際はトム
トム（三輪オートバイ）

■12月13日：ジフテリア流行

11月初旬から避難民キャンプでジフテリアの流行が始まりました。予防接種で防げる病気のため日本では約20年前より発生の報告がありませんが、小児や高齢者など脆弱な人が罹患すると重症化しやすい重大な感染症です。主な症状はのどの痛みや腫れがあり、心臓や腎臓に障害を及ぼすこともあります。インフルエンザのように飛沫を介して感染が広がります。現地では、細菌検査ができないので、のどの診察は診断において非常に大切です。流行の背景には、予防接種の未接種、過密で衛生状態が悪化したテントの中での生活があります。



受付の隔離下で喉の奥を診て、腫れを確認する



一つの狭いテントに何家族もが住んでいる

ジフテリア発症を疑う患者が来院した際は隔離下で診察し、しかるべき治療施設へ直ちに搬送しています。そして、周囲の医療施設と連携し、患者の家族やテントに同居する全ての方を対象に、ジフテリア感染の早期発見と発症予防内服継続管理のため、接触者追跡調査活動を行っています。避難民ボランティアと日赤の看護師がチームを組み、患者の家を訪問し、病気の説明や予防のための薬を処方します。その後も定期的に訪れ、服薬状況や健康状態の聞き取り、手洗いや咳エチケットなどの衛生行為を励行します。2月1日現在、累積70件以上の家庭訪問を実施しています。

また、診療所でのボランティア活動に携わる避難民へも予防接種を実施しました。勉強会も開き、病気から身を守る方法などを地域に広めました。

2018年2月15日現在、WHOによると5,659件の感染疑いが報告され、35人が死亡しました。日赤は、日本にいる数少ない専門家を緊急派遣し、迅速な現地の体制作りなどを支援しました。



ボランティアを守ることも重要な任務である

■2018年2月16日：日赤緊急医療チーム第5班を派遣

これまでに延べ100人以上をバングラデシュに派遣し、支援を継続しています。

数字で見る日赤の活動（2018年2月21日現在）

平時から地域に根付いた活動を展開しているバングラデシュ赤新月社スタッフに加えて50人の避難民ボランティアとともに避難民キャンプでの医療支援を実施しています。

2万5000人を診療	4万人にこころのケア
 ©IFRC/Victor Lacken	
狭いテントや不衛生な環境が風邪や下痢、皮膚の病気を引き起こしている	キャンプでの不自由な生活や先の見えない将来は避難民のこころの大きな負担となっている

国際赤十字はバングラデシュとミャンマー双方で支援を展開

ミャンマー・ラカイン州では今でも暴力行為の発生が報告されています。同地域には、何かしらの理由で避難できない脆弱な人々が多く残っています。移動が制限されていることや山間部などのアクセスが悪い場所に住み、学校や病院にも行けない人々に対し、赤十字は地域のボランティアの力を借りながら支援を続けています。



© Hla Yamin Eain/ICRC



© Hla Yamin Eain/ICRC

食料や生活用品、現金配布、こころのケアなど支援活動は多岐にわたる

50 万リットル以上もの安全な水を提供するとともに衛生教育を実施

「壁」を越えて支えあう（伊勢赤十字病院 看護師長 東恵理）



ある日、診療所に来ることができない女性の夫から往診の依頼があり、彼らの住むテントを訪れました。そこには産後間もない双子の女の子がいました。それぞれ体重が 1,300 グラム程度しかなく低体温、栄養失調となっていました。医師がこのままでは危険であると判断し、近隣の病院への受診を勧めました。しかし、両親とも「慣習で産後 1 週間は子どもも母親も家の外に出てはいけない、だから行けない」と拒否されました。そのため保温と授乳指導を実施し、その後も往診を行いました。しかし、1 人の児はその日の夜に、もう 1 人の児は数日後、往診した私たちの目の前で亡くなりました。

日本では助けられる命が助けられないということに、私もチームメンバーも辛さやジレンマを感じました。悔しいと涙する者もいました。現地の文化や慣習を尊重しながら、私たちの使命をどのように果たせるかをチームで何度も考え、話し合いました。そのような中で

心に残っているのは、バングラデシュ赤新月社の医療スタッフ、そして避難民ボランティアが「苦しんでいる人を救いたい」と口にしていたことです。置かれている立場はそれぞれ異なりますが、そのような共通の思いを抱きながら力を合わせて支援に取り組んでいます。苦しい時にお互いに支え合うことは、国籍や宗教などに関係なくみんな同じで、とても大切なことだと思います。

今そして今後、必要な支援



土嚢とロープを使って、
診療所の屋根を固定する
避難民ボランティア

4月頃からバングラデシュは雨が多くなる季節になります。そのため、現在は仮設診療所や巡回診療の拠点としているテントの補強工事に取り組んでいます。竹材やロープ、土嚢を用いて屋根や壁面をしっかりと固定し、強風を伴う豪雨にも耐えうるよう設計しています。現地で調達できる備品を活用し、また避難民のボランティアの建築ノウハウを活かしながら、どのような時も医療を提供し続けられる環境づくりを進めています。

また、過密なテントでの暮らし、更には衛生環境が整っていないキャンプでは引き続き感染症の流行が懸念されています。

日本赤十字社は、支援を必要とする人々がいる限り、避難民キャンプでの医療支援活動を継続します。

救援金を受付中

避難民を取り巻く状況は日に日に深刻化しています。ご寄付頂いた救援金は、日本赤十字社による保健医療支援に加え、避難されている方々の食料や生活必需品、安全な水などの提供などに充てられます。皆さまの温かいご支援をよろしくお願いします。

避難民キャンプでの生活、いくら必要？

・水1リットル	40円	・毛布1枚	300円
・Tシャツ1枚	200円	・歯ブラシ1本	30円

あなたの支援が人々の**いのちを救い**、
そして避難生活を支えます

ご協力方法>>クレジットカード・郵便局・お近くの赤十字窓口

<http://www.jrc.or.jp/>

日本赤十字社 東京都港区芝大門1丁目1番3号

本資料に関するお問い合わせ 事業局国際部 TEL 03-3437-7088

寄付に関するお問い合わせ 事業局パートナーシップ推進部 TEL 03-3437-7081